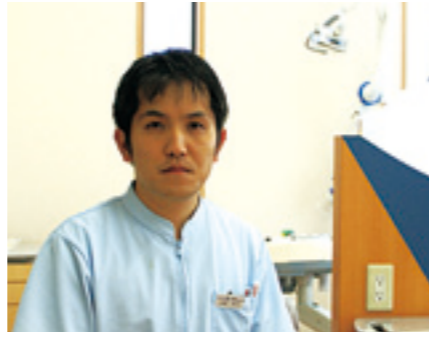


赤ちゃんからお年寄りまで 安心と満足感を

伊藤歯科医院 院長
伊藤 辰也 いたう たつや



「努力と感謝」、私が4年前に金沢大学に赴任した際に色紙に書いた言葉です。昭和59年に徳島大学の医学部医学科に入学後23年間お世話になった徳島大学を離れることになり、改めて自分を支えてくれた多くの方々の存在の大きさに気づき、感謝という文字が自然と浮かんでまいりました。それと同時に、新天地で何をなすべきか？自分とは何か？そのようなことを自問自答しました。その結果、たどり着いたのは「自分らしさを出す」ということでした。徳島大学での思い出は数限りなくありますが、医療面ではゲフィチニブの臨床試験が一番深く刻み込まれています。私が医師になって以来ずっとご指導いただいている曾根三郎教授（呼吸器・膠原病内科）のご好意で、肺がんの分子標的薬（ゲフィチニブ）の臨床試験において、当時講師であった私を徳島大学の責任医師にさせていただきました。その臨床試験では、私が担当した患者さんの腫瘍が劇的に縮小しました。また、国際多施設共同試験であったこの臨床試験において、徳島大学が施設別で最多の症例（世界第一位）を登録し、注目を集めました。当時の肺がん薬物療法の常識をくつがえしたこの臨床試験の成績によって、ゲフィチニブは世界に先



努力と感謝

金沢大学がん研究所 腫瘍内科
矢野 聖二 やの せいじ



略歴
平成2年3月 徳島大学医学部医学科卒業(36期生)
平成2年6月 徳島大学大学院附属病院研修医(第三内科)
平成7年3月 徳島大学大学院医学研究科博士課程(内科系)修了
平成9年1月 徳島大学医学部助手(第三内科)
平成9年9月 米国テキサス大学 MD Anderson Cancer Center, Department of Cancer Biology, Visiting Assistant Professor (Isaiah J. Fidler 教授)
平成12年10月 徳島大学医学部・歯学部附属病院 講師(呼吸器・膠原病内科)
平成19年4月 金沢大学がん研究所腫瘍内科教授
金沢大学附属病院がん高度先進治療センター長 現在に至る

「努力と感謝」、私が4年前に金沢大学に赴任した際に色紙に書いた言葉です。昭和59年に徳島大学の医学部医学科に入学後23年間お世話になった徳島大学を離れることになり、改めて自分を支えてくれた多くの方々の存在の大きさに気づき、感謝という文字が自然と浮かんでまいりました。それと同時に、新天地で何をなすべきか？自分とは何か？そのようなことを自問自答しました。その結果、たどり着いたのは「自分らしさを出す」ということでした。徳島大学での思い出は数限りなくありますが、医療面ではゲフィチニブの臨床試験が一番深く刻み込まれています。私が医師になって以来ずっとご指導いただいている曾根三郎教授（呼吸器・膠原病内科）のご好意で、肺がんの分子標的薬（ゲフィチニブ）の臨床試験において、当時講師であった私を徳島大学の責任医師にさせていただきました。その臨床試験では、私が担当した患者さんの腫瘍が劇的に縮小しました。また、国際多施設共同試験であったこの臨床試験において、徳島大学が施設別で最多の症例（世界第一位）を登録し、注目を集めました。当時の肺がん薬物療法の常識をくつがえしたこの臨床試験の成績によって、ゲフィチニブは世界に先

駆けて日本において肺がんに対し認可されました。この何事にも変えがたい貴重な経験をふまえ、自分らしさを出すためには、肺がんの分子標的治療の進歩に貢献する以外にはないと考えるにいたりました。

自分の中に眠る遺伝子をよび起こせ！

「背水の陣では自分の中に眠っている遺伝子が発現してきて、新たなことができるようになりますよ。」これは、同じ時期にある友人からもらった言葉ですが、今となってようやくその言葉の意味が理解できるようになってきました。がんにおいては、がん抑制遺伝子がメチル化を受けて働かなくなつた結果、がんが発生するとよく言われます。自分ががんになってはいけません。困難に直面した場合には真剣に取り組むことにより、自分の中でメチル化をつけて眠っている遺伝子が発現してきて自身を活性化するのもかもしれません。とにかく、仕事に思い入れを持つことによって、寝ても覚めても思い続けることによって、最善を尽くすことによって始めて新たな方向性が見えてくるのだと思います。その意味で、努力し続けることがやはり大切だと感じます。現

在、私は金沢大学附属病院のがん高度先進治療センターで肺がん、膀胱がん、原発不明がん患者さんに対する抗がん剤および分子標的治療を実践しています。と同時に、金沢大学がん研究所の腫瘍内科研究分野において、肺がんの分子標的薬耐性を克服する研究を行い、肝細胞増殖因子(HGF)がゲフィチニブという薬剤の耐性を誘導することを明らかにし、HGFによる耐性を克服する研究を行っています。また、アスベスト暴露により発生する胸膜中皮腫の新しい治療薬の開発も手がけており、候補薬剤を臨床試験に持っていく一歩手前までこぎつけています。肺がんと胸膜中皮腫という難治性の呼吸器悪性腫瘍を制御する薬物療法の開発を目標に、これからも臨床や研究を続けていく所存です。

New 徳島大学で羽ばたけ！

私が徳島の地を離れてからの4年間で、徳島大学は大きく変わりました。医学部の基礎および臨床研究棟のほとんどがリフォームされ、西病棟も完成しました。セキュリティも厳しくなり、阿波踊りの期間中に基礎の教室を訪問いたしました。ロックがかかっていた立ち往生しました(笑)。世界トップレベルの研究や臨床が実践



平成22年4月、第28回日本医師卓球大会の団体戦に金沢大学チームとして出場し、みごと優勝しました。左から2番目、トロフィーを持っているのが著者。ユニフォームを着ていませんが選手として出場しました。

「先生時代、勉強はもちろん大切ですが、卒業して勤めると自分の時間が少なくなります。学生の間に余裕を持って、いろんなものに興味を持ち学んでください。また臨床医になれば人と接することが多くなります。ですから「コミュニケーション能力を身につける努力もしてください」

病院は多いといっても、片や医師不足も深刻な現在、現役生には大きな使命と期待がかかっています。

「先生時代、勉強はもちろん大切ですが、卒業して勤めると自分の時間が少なくなります。学生の間に余裕を持って、いろんなものに興味を持ち学んでください。また臨床医になれば人と接することが多くなります。ですから「コミュニケーション能力を身につける努力もしてください」

病院は多いといっても、片や医師不足も深刻な現在、現役生には大きな使命と期待がかかっています。



学生時代の伊藤先生